

市民による夏季展示
めぐる・かわる・つながる
さがしてみよう！ すいたの自然

会期：令和7年（2025年）7月19日（土）～8月24日（日）



撮影と構成：内田陽造

撮影場所 左上：都市緑化植物園、右上：佐竹公園（菩提池）
左下：安威川右岸（新京阪橋上流）、右下：千里南公園の梅林

本年の夏季展示のテーマは「さがしてみよう！すいたの自然」です。「めぐる・かわる・つながる」の通しテーマのもとでは5回目となります。

このたび当館には「すいはく自然発見隊」という団体が結成され、年間を通じた活動の一環として夏季展示を担っていただくことになりました。自然発見隊のメンバーはさまざまな機会をとらえ吹田の自然に関する情報の入手に努めています。その成果を夏の展示で公表すべく、本誌に寄稿してくださいました。当館までの道のり約4キロを北の三色彩道、西の都市緑化植物園、南の中の島公園、東の新幹線公園からたどる描写もあれば、枕草子の四季感をたよりに吹田の四季を探った記述もあります。また、当市を流れる川の水生生物調査からもいくつかの発見が報告され、まちなか水族館の活動の一端にもふれることができます。

自然発見隊のメンバーと同様に自然をさがしに行きましょう。本番の展示にもご期待ください。（当館特別館長 中牧弘允）

すいはく自然発見隊

毎年夏に開催される夏季展示は博物館が公募した市民ボランティアによって企画運営が行われてきました。

吹田の歴史と環境を学び調べながら、展示の企画を考える、とても刺激的で興味深い活動であり、またメンバー同士の交流が楽しくて毎年参加してきました。

しかし、4月からの準備と開催では時間が足らず、約半年の活動だけで解散してしまうのは惜しく、年間を通じて活動していく必要があると常々思っていました。

そんな思いから、一年を通して活動し、吹田の自然について調べるグループをみんなで立ち上げ、その成果を展示やイベントを通して発表することとしました。夏季展示はその活動のうちのひとつです。

一名付けて「すいはく自然発見隊」—

吹田にはまだまだ“守るべき自然”や、“訪ねてみるべき歴史”があります。

丘陵に咲くコバノミツバツツジが薄紫色に輝いて見えたことから名づけられたという紫金山、牧野富太郎博士が吹田原産と学名を付けた吹田クワイ、「キジも鳴かずば撃たれまい」の諺が残る雉罾の碑、吹田の天然記念物ヒメボタルが舞う千里緑地、釈迦が池の鴨とプロイセン皇太子の遊猟事件などなど、私たちが暮らす吹田の歴史と環境を改めて見つめ、自然や環境について発見し学んだことを吹田市立博物館(吹博)の夏季展示などで表現し、市民のみなさんにも発見してもらうこと

を目的に名付けました。

今年の展示テーマは、「めぐる・かわる・つながる さがしてみよう！すいたの自然」です。

吹田の自然環境の移り変わりから、糸田川と大正川の水辺の生き物たちなどを紹介します。また、吹田には宝といえるヒメボタルや吹田クワイがあり、絶滅が危惧される貴重な植物が残る一方、オオキンケイギクやアライグマなど環境に影響を与える外来種も侵入してきており、いま守るべき自然と生物多様性について考えます。

吹田で見ることができる野鳥とその生態、植物は毎年市内の小学校のみなさんからいただいた自然はっけんシートで多く観察されているアジサイを取り上げます。吹田を再発見するための映像コーナーやロビーにはミニ水族館を設けます。

展示室中央には、私たちみんなで作り育て、自然にふれる楽しさや大切さをじ感てもらう“大きな木”があり、この木を囲んで自然について楽しく学ぶクイズコーナーも予定しています。

夏季展示を見ていただき、何かを発見していただけたら、私たちと一緒に発見隊の活動にご参加ください。皆さんの参加をいつでもお待ちしております。

(すいはく自然発見隊会長 藤田和則)

清少納言「枕草子」の四季感に想う ～吹田の四季の移ろいはいかに～

昨年NHKの大河ドラマ「光る君へ」を見られた方も多いのではないだろうか。そのドラマの中で紫式部とライバル関係の清少納言は、お仕えする中宮藤原定子への深い敬意と愛情をこめて機知に富んだ随筆「枕草子」を執筆した。中宮定子がそれを読んでいる映

像に四季の映像と柔らかなひらがな文字の映像がオーバーレイされて、幻想的なシーンを演出していた。その映像を見て、枕草子の冒頭文は高校時代の古文の授業で習ったことを懐かしく思い出して再度読み返してみた。

『春はあけぼの。やうやう白くなりゆく、山ぎは少しあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は夜。月のころはさらなり。闇もなほ、螢の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。

秋は夕暮。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、鳥の寝どころへ行くどて、三つ四つ、二つ三つなど、飛び急ぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音など、はたいふべきにあらず。

冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず。霜のいと白きも、またさらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭もて渡るも、いとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も、白き灰がちになりて、わろし。』

現代語訳はともかくとしてこの冒頭の文を読むと季節の移ろいを非常に繊細で美しく表現されており、清少納言の四季折々の自然に対する観察力と素晴らしい感性に感銘を受けたことを高校時代の思い出として記憶している。

では、私たちの暮らす吹田市の四季、季節の移ろいについて平安時代の四季感と対比して考えてみれば、枕草子ばかりとはもちろんいかないが、どのように季節の情景を表現できるのだろうか。

『吹田の春。万博記念公園の梅林の白梅、紅梅が咲きそろってほのかに甘い香りを漂わせることで春の訪れを感じさせてくれる。しかし今年の梅の開花は、最強で最長の寒波が繰り返しやって来たせい大幅に遅れた。月日が経ち柔らかな陽光に包まれ万博記念公園や各地の公園で桜の花が一斉に咲きほこり、新しい大きなランドセルを背負った新一年生の弾む声に心が温かくなり、彼らの未来への希望と期待が湧いてくる。阪急千里線の車窓から眺める桜並木も吹田ならではの風景である。

また紫金山ではコバノミツバツツジの可憐な花で山一面が紅紫色に覆われたさまは圧巻である。

吹田の夏。高町池にかけての緑地帯で幻想的な光の舞を見せてくれるヒメボタル、初夏の訪れである。千里ニュータウンの並木道が

濃い緑につつまれ、賑やかな蝉の声に猛暑を感じる。

片山市民プール、子どもたちが元気いっばいに水を跳ね上げ、響き渡る歓声と笑い声がよい。

市立博物館の夏季展示やイベントを楽しむ子どもたち。万博記念公園で行われるすいたフェスタのスプラッシュパーティーも風物詩。だが地球温暖化による異常気象や自然災害のニュースにため息をつく。

吹田の秋。黄色や赤色に染まる木々が美しい。北千里の三色彩道を訪れる人々の歓声。佐竹台の菩提池を囲むメタセコイヤ並木道をランニングする若者。

キジバトが樹木に止まり、カルガモ、マガモが楽しそうに泳いでいる。偶然に見つけた青とオレンジ色の小さな鳥、カワセミだ。千里南公園の紅葉が彩づき少し肌寒くなった季節の中、散策する家族づれ。池畔のパークレストランで温かいコーヒーを楽しむ老夫婦。山田伊射奈岐神社の秋祭りの太鼓が心地よい。七五三で賑わう神社の境内。産土神を祀る地域の暖かさを感じる季節だ。

吹田の冬。冷たい風が街を吹き抜け、江坂の街をコートの襟を立てて忙しく行き交うビジネスマン。クリスマスのイルミネーションが澄んだ空気の中で色とりどりに点滅し幻想的に輝く。吹田くわいの収穫もまぢか。おせち料理の含め煮で今年も芽が出る（めでたい）と縁起をかつぐもよし。』

さて、このように枕草子が書かれた千年前と今では自然や四季の感じ方も過ごし方も変わった。しかし自然や四季の美しさはどの時代も変わらず、共通しているのが私たちのすぐそばにあるということだ。

自然を守り四季と花鳥風月の心を大切にしたいものである。

（すいはく自然発見隊 西尾 昌）



コバノミツバツツジの花
紫金山の名称も紫色に染まるコバノミツバツツジの群生からつけられたといわれています。

吹田の自然さい発見 —博物館まで約4キロ—

プロローグ

吹田市立博物館まで直線距離で約4キロの地点は、北の方角だと北千里の「三色彩道」の辺り。西は豊中市にまたがる「都市緑化植物園」、南は神崎川沿いの「水鳥の道」や「中の島公園」、東は摂津市の「新幹線公園」付近です。実際には大きな溝や壁があったり、道が塞がっていて、すんなり直進できないのですが、この際、場所を越え、季節を越えて、東西南北から博物館のある「吹田風土記の丘・紫金山公園」をめざしたいと思います。自然の景観、鳥や草木の様子などを観察しながら、どのような「さい」発見があるか楽しみです。

第1章 三色彩道から

まず北から南へ。駅から水遠池に向かう街路樹、11月末には見事な紅葉。【写真1】ここ三色彩道は、「彩」発見に行きたい場所、次代に継ぎたい場所です。



写真1



写真2

藍色の水遠池の水際から7月の緑の森へ。自然文化園中央口の天井でツバメの巣を発見。子育て中です。季節は秋へ。遠見の丘の展望塔から見渡す森の景観。【写真2】大きく育った木々の向こうに国立民族学博物館や日本庭園、遠くの山際には彩都の街並み。1970年の大阪万博で「月の石」が展示されていたアメリカ館は、写真の右手前付近だったでしょうか。いろんな経緯があったようですが、閉幕後、瓦礫で埋もれた跡地で始まった森の再生の歳月。関係者の創意と熱意の半世紀。まさに「再」「歳」発見です。

早春の黄色い「菜」発見、菜の花（アブラナ）です。蜜を求めて小さな蜂たち集まって

います。そして「祭」発見も。「梅まつり」が始まったころは雪模様。品種によって差があるものの、まつり期間が終わり、数日後ようやく見頃に。一生懸命咲いているウメに罪はないし、後の祭りもきれいだなと思っているうちに、お祭り広場付近でソメイヨシノが一齐に開花。気候変動の加速で自然のサイクルが変化し、長期予報や開花予想も難しくなっているようです。

次にやってきたのは高町池。5月後半にはヒメボタルが見事な光の舞。高町池から海老池へと続く千里緑地第4地区の自然環境が、適切に維持されているおかげですね。緑地でも「再」発見。札に「竹林再生中。筍達の成長を優しく見守ってください」の文字。青空に向かって伸びるモウソウチク。緑のモミジの遊歩道。ウシガエルの重低音と鳥たちのハイトーン。博物館まであと1キロほどです。

釈迦が池の冬。マガモが泳いでいます。高台で鳴いているのはシジュウカラでしょうか。最近の研究によれば、シジュウカラは、いくつかの鳴き声を使い分けてコミュニケーションをとるとか。興味深いですね。

第2章 都市緑化植物園から

「西」での発見を期待してスタート。チューリップを見かけました。温室でサボテンの花を発見。【写真3】園内を歩くと、鎌池の畔に白く大きな鳥を発見。このフォルムで水際に居るのは、ダイサギかな？【写真4】



写真3



写真4

6月、アジサイが彩り豊かに咲いています。「躑か^{つまず}ないよう気をつけて」の標識。メタセコイアとラクウショウ、どちらもヒノキ科の高木ですが、「メタセコイアの葉は対

生（枝に対して針葉が対）、ラクウショウの葉は互生（枝に対して交互）」、「メタセコイアにはない気根（呼吸根）がラクウショウにはある」とのこと。「差異」発見です。

緑化植物園の西側を流れる高川の上流は、牛ヶ首池(千里南公園)につながっています。行ってみましょう。3月の「採」発見、満開のウメに、蜜を採るためメジロが目白押し。5月の「栽」発見。栽培園でスイタクワイが芽を出し成長中。

次は佐竹公園（菩提池）へ。晩秋、紅茶色のメタセコイアやラクウショウが水面に映り、その上をアオサギが飛び水彩画のような景観です。シダレザクラの下に「アケボノゾウの歯の化石発見地」の説明板。地元の子どもたちは良く知っていても、大人は見落としがち。アケボノゾウの繁栄は120～250万年前。ずいぶん大昔ですが、46億年の地球史からすれば新参者。6月後半、ハス園で「災」発見。昨年と大きな差異。ハスがほとんどない。ミシシippアカミミガメやバンが新芽を食べてしまったため？ それとも他に原因？

紫金山公園にやってきました。トンネルを抜け、博物館の手前右手に「ピンク火山灰露頭観察地点」の標識。約100万年前、九州で起こった大噴火で積もった火山灰が、長い年月を経てこの場所に露出。小さな破片を採取し、指先で押すと砕け、ざらざらした手触り。顕微鏡で観察すると細かなガラスが見えて、「採」「砕」「細」発見。

第3章 中の島公園から

次は南から北へ。公園【写真5】や中学校の北側に神崎川の分流の名残り。古い河川跡に残る欄干。晩秋の水鳥の道を神崎川・安威川合流地点付近へ。今年もユリカモメに「再」会。安威川を遡り、新京阪橋を過ぎ、浅瀬にアオサギたちの姿。



写真5

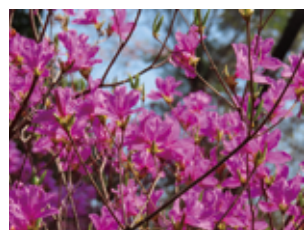


写真6

こっちの健都は春。レールサイドパークの遊歩道。同じサクラ属でも花の色や咲き方は多「彩」。白っぽい花はヤマザクラ、桃色の八重はサトザクラ。博物館まであと一息。コバノミツバツツジは昨年よりも元気そう。【写真6】

第4章 新幹線公園から

最後は東から西へ。0系の先頭車両の向こう側、三箇牧鳥飼水路の堤防沿いは、ソメイヨシノの並木が見事。【写真7】^{おぼろげぼし} 朧ヶ橋を過ぎ、西別府の辺り、水路に沿って、手入の行き届いた長い桜並木。土地改良に努力してきた人たちの思いが伝わります。安威川人道



写真7



写真8

橋を過ぎると吹田市南正雀です。

晩秋の市場池オアシス広場にユリカモメが「再」飛来。滞在予定は早春まで。春の彼岸に入る頃、冬と春、初夏までもが交差する中、焦るユリカモメに「北国行きは待って」と淡雪が舞っています。翌週には気温急上昇。ゴビ砂漠から偏西風とともに黄砂が飛来する最中、アオサギやカワウに見送られ、飛び立ったようです。【写真8】ところで、渡り鳥は視界の悪い中で、どうやって進む方角を知のでしょうか？ 地磁気を感じているという説が有力ですが、興味深いです。6月、田植えの様子を見ながら、無事、吹田風土記の丘・紫金山公園に到着です。

エピローグ

写真は一部しか載せられず、文章もダイジェストになりましたが、それでも多くの「さい」発見があり、いろんな自然の色彩に出会い、様々な変化やつながりを感じます。最近のサイエンスの一端も知り、次々と新たな興味が湧いてきます。詳細は博物館の夏季展示で。

（すいはく自然発見隊 内田陽造）

糸田川と大正川の水生生物調査を通してわかったこと

私たち吹田の川をしらべ隊は、毎月一回、吹田近辺の河川で水生生物調査を実施しています。その水生生物調査も始めてから3年が経とうとしています。

当初は、魚類や甲殻類など、とにかく捕獲するだけの目標で始めました。3年が経過すると「すいたの自然 2021」で報告されている環境 DNA 解析による魚類の種数をほぼ確認することが出来ました。その一方で、実際に目視による私たちの調査と環境 DNA 解析による分析結果との間に違いがあることも分かってきました。

糸田川は吹田市内、大正川は茨木市から摂津市内を流れる数km程度の小さな河川です。大都市とは言えませんが両河川とも市街地を流れる三面をコンクリートで囲まれた川で、水深は浅くて水流にほとんど変化が無く、水源が山地にある安威川のような変化にとんだ環境を流れてくる河川と大きく違ってきます。

そんな2つの河川は、一見すると生物はそんなにいないように思えてしまいがちですが、実際に調査を進めていくと、想像もしなかったような水生生物と出会うことが出来て、毎回驚きの連続です。そして今では両河川とも生物の多様性に富んだ環境であることを私たち

は感じています。さらに水生生物だけではなく、河川敷に分布している植物とそこに生息している昆虫類や野鳥など様々な生物を見ることの出来る環境にもなっています。

糸田川で調査をしている時、住民の方から河川敷をよくキツネやヌートリアが移動していることを聞きました。河川は水生生物だけではなく、そこに広がる緑地を通してはキツネやタヌキなどの陸上哺乳類も移動している緑の回廊になっているのです。

今回の展示では、両河川を比較し違いを知ってもらおうことと、これまでに確認している水生生物を紹介したいと思っています。そのことで私たちが生活している身近な場所に多くの生物が生息していることを知ってもらいたいと思っています。

(すいはく自然発見隊 奥山佳一)



上：大正川の水生生物調査、下：糸田川の水生生物調査

★イベント「芥川で魚とり」に参加して★

イベント「芥川で魚とり」

令和6年(2024)7月25日、高槻市にある、あくあぴあ芥川にて「芥川で魚とり(吹田市立博物館主催/夏季展示イベント)」を開催しました。

吹田市の熱中症警戒アラートが心配される中、親子30組が参加されました。7月の暑い中、子ども達が思い思いの網で魚を追いかけていました。魚や水中に生息する様々な生き物をつかまえて、喜びの声があがっていました。また、あくあぴあ芥川の学芸員桑原さんによる投網での魚とりでは、たくさんの魚(オイカワ、ヨシノボリ、カマツカなど)がとれました。

1時間ほど川で魚をとった後は、参加者の皆さんが採取した魚や生き物について、桑原さんから詳しい解説があり、皆さん興味津々で聞き入っていました。解説と観察後は、魚や生き物たちをもとの住処である、川に返しました。(このイベントでは、取った魚は、川へ返します。ご理解いただけますようお願いいたします。)

おかげさまで、これまで事故もなく人気イベントとして続けることができました。ただ、昨年度は堰堤の水深が深い危険なところに潜って魚を取ろうとしている人や、魚とり

に夢中になってしまいスタッフの声が届いていないことも見受けられ、危険だと感じるものが度々ありました。皆さんの安全を守るためにお声がけしています。ご協力よろしくお願いいたします。今年も楽しく、安全に開催できたらうれしいです。

「吹田の川をしらべ隊」の紹介

「吹田の川をしらべ隊」は、まちなか水族館の有志5人によって、令和5年4月25日に発足した団体です。吹田市内の河川に生息する在来種の保護、外来種の駆除、河川の美化清掃をおこない、本来の河川に戻す活動をおこなっています。毎月第4火曜日に糸田川・大正川で調査(ガサガサ)しています。

(すいはく自然発見隊 神原快司)



上・下: 令和6年(2024)7月25日 親子で魚とり@芥川

展示のみどころ

令和7年度夏季展示 めぐる・かわる・つながる「さがしてみよう！すいたの自然」では、私たちの身近な場所にも多くの生物が生息していること、ほんの少し意識すればそれらと出会えることを知ってもらうことを目標としています。

●吹田の自然環境

吹田市域の大部分（名神高速道路以北）は1960年代に開発される以前は、尾根と谷が入り組んだ緑豊かな丘陵地帯でした。かつてはよく見られた動植物や、それらを活かした昔の人々の暮らしの道具などから吹田の自然の特徴を紹介します。

●大きな木

吹田の自然の特徴は、昔も今も人々の暮らしと共にある自然であり、人々によってつくられてきた自然・育まれてきた自然ではないかと考えました。その象徴として展示室の中心に大きな木を制作します。そして展示期間中に葉や枝を来場者のみなさんにつくっていただき、緑生い茂る豊かな木へと成長させる試みを予定しています。

●糸田川と大正川をくらべてみたら

糸田川（吹田市）と大正川（茨木市～摂津市）はどちらも市街地を流れる小さな河川です。三面をコンクリートで囲まれ一見すると自然とかけ離れて見えるこの2つの河川に注目し、両河川の環境の違いやこれまでに確認された水生生物（標本）を紹介します。

●在来種と外来種

日本各地で外来種による自然環境への影響が大きな問題となっています。現在、吹田市内で確認されているアライグマ、ヌートリアなどの外来種の実物（はく製）を中心に、それらが日本へ持ち込まれた経緯や自然環境への影響について見ていきます。

●吹田の宝

ヒメボタル、コバノミツバツツジ、吹田クワイの3つは、その生育環境が吹田の自然環境を象徴しているという点でまさに「吹田の

宝」といえます。この3種についてそれぞれの特徴や、貴重とされる点について紹介します。

●吹田で見られる野鳥

「都市」としてのイメージの強い吹田市ですが、意外と多くの種類の野鳥を見かけることができます。私たちが街なかの小さな緑地や、ため池や川といった水辺など、身近な場所で目にすることができる野鳥（はく製）を中心に、その特徴を紹介します。

●すいたの自然はっけん！アジサイのひみつ

例年、夏季展示では市内小学校4年生のみなさんに「すいたの自然はっけんシート」を配布し作品を募集しています。その中で応募数が多かったアジサイに注目して、子どもたちが興味を持ったことや疑問点について掘り下げて紹介します。

●吹田の自然さい発見

吹田市立博物館まで直線距離で約4km・東西南北方向の各地点から博物館を目指して歩くとどんな風景が見えてくるのでしょうか。各ルートで見られる四季折々の自然の景観、鳥や草木の様子などのスライドショーによって、自然「さい」発見の旅に誘います。

●すいたの水辺の生きものたち（飼育展示）

3階ロビーで吹田やその周辺で見られる水生生物を飼育展示します。

※展示内容は予告なく変更となる場合があります。

（すいはく自然発見隊 越智みや子）



飼育展示（イメージ）